多文化をささえる人びと

日本を差別のない、多民族・多文化共生社会に！

「外国人労働者」ということばには、日本人となんら変わらない喜怒哀楽をもった生活者のイメージはない。日本人と外国人とがどう協力しあって生きるかをさぐるRINKを訪ねた

藤井幸之助（ふじいこうのすけ）
神戸女学院大学非常勤講師
専門は、在日朝鮮人論・民族まつり／マダン研究。日朝関係史を若い世代に伝えるために、今年一〇月に『ある在日コリアン家族の物語――つないで、手と心と思い――絵と物語で読む在日一〇〇年史』（共編・アットワークス）を刊行した。

日本の入国管理局がみとめる外国人の在留資格は二七に細かく分かれているが、非熟練労働者の入国を認めていない。移民送り出しと受け入れの歴史は長いにもかかわらず、明確な移民政策はなく、外国人受け入れ政策も場当たり的であった。

二人の子連れで台湾に語学留学

現在、RINK事務局長を務める早崎直美さんは三代目だ。毎週水曜日に事務所に出る。予算がないので専従ではない。

直美さんは一九五一年に岐阜で生まれた。戦前期、近くで石灰の採掘に多くの朝鮮人が従事していたようだ。そのためか、子どものころから地域に暮らす外国人がなんとなく気になっていた。同級生に朝鮮人の親友がいたのがその一因であったかもしれない。

京都の大学に進学したが、専攻の文学より、外国人の入管問題に関心をもつようになった。とくに当時の華青闘（華僑青年闘争委員会）の人たちから影響を受けて二年で中退したあと就職し、労働組合で十数年活動した。しかし外国人問題は念頭からはなれず、それなら中国語を勉強しようと、仕事を辞め一九九〇年に二人の子どもを連れて台湾の台北に一年間留学した。

帰国後、とりあえずパートの仕事をはじめたが、外国人関連の支援活動への興味はずっとあった。ちょうどそんなとき、縁があってRINKとかかわるようになった。すでに一九八〇年代、カラバオの会（横浜）、アジアンフレンド（大阪）など各地で外国人支援の活動が増えはじめており、RINKも一九九〇年代に入って結成されていたのだ。

労働者送り出し国の在大阪領事館との懇談会も積極的におこなっている。写真は在大阪タイ王国総領事館での話し合い〈提供・RINK〉

連合大阪主催「外国人労働者なんでも相談ダイヤル」〈提供・RINK〉

問題があるのに「ほっとけない」

早崎さんは毎年、連合大阪主催の「外国人労働者なんでも相談ダイヤル」をコーディネートしている。今年は六四件の相談（労働・社会保障・在留資格・家族の順で多い）が寄せられた。大阪を中心に、東北、関東、中部、東海、近畿、四国、九州の一五都府県にわたった。

日本人の心のなかには「外国人は別」という考え方があるようだ。なにかトラブルがあったり、外国人が権利を主張すると排除しようとしたりする。だから寄せられる相談は深刻で、決して楽しいものではない。

早崎さんはいう。「しかし、少し前に外国人労働者に起こっていたことが、民族・国籍の垣根を越えて、日本人労働者にも非正規雇用の増加、派遣切りのようなかたちでどんどん起こってきています。普通に考えておかしいことはほっとけません」。

知らないうちに本人の携帯番号が口コミで外国人のあいだに広まって、時間外に相談を受けることも多い。「インフォメーションで終わらない相談を心がけて、最後までお付き合いさせてもらっています。解決のプロセスのなかでこちらが学ぶことがいっぱいあっておもしろいんです」。

日本人主導から当事者本位に

「差別なく共に生きるための異文化交流」をテーマに、RINK発足の一九九一年から「マイ・マイ・フェスティバル」（Migrant and Minorities Festival）を開いてきた。外国人労働者の存在と課題について、文化を通して知る場として、画期的な取り組みだった。二〇〇七年まで一六回おこなわれたが、スタッフの減少、マンネリ化、かさんだ赤字のため、二〇〇八年は中止となった。

今年も再開できなかったが、それに代わるものが現れた。「異文化交流FESTA in 天保山」だ。在日ブラジル人が中心になって企画・運営して、今年一〇月二五日に開かれた。夜通しでやりたいというブラジル人たちに、まずは昼間だけやってみようとセーブをかけた。他の協力団体とともに今回はサポートする側に回る。

あなたの力を貸してください

この夏、「出入国管理及び難民認定法」、「日本国との平和条約に基づき日本の国籍を離脱した者等の出入国管理に関する特例法」、「住民基本台帳法」の改定案が衆・参両院で可決された。これによって、七月一五日の公布日から三年以内に、外国人登録制度に代わる「新たな在留管理制度」、「外国人住民票制度」が実施される。当事者の事情より、日本社会にとって有益な外国人だけを選別する制度になりそうな気配だ。「まるで外国人は『害国人』のような扱い。こんな意識の問題点を理解してもらうのがなぜこんなにも大変なのか。外国人と対等な関係をどうすればつくれるのか？　日々の業務のなかでつきつけられています」。

問題は多様化・複雑化していて、国際人権規約などの国際的な人権基準をこの日本で当たり前にすることが当面の目標だ。ボランティアの募集は随時おこなっている。通訳、翻訳などの言語能力や相談のさいに専門知識の必要な仕事のほかに、さまざまな仕事がある。

「一緒にやっていくという発想があれば誰にでもできます。若い人も若くない人も、あなたの力を貸してください」とよびかける直美さんのメッセージには重みがあった。

RINK事務所で電話相談を受ける早崎直美さん

RINK
すべての外国人労働者とその家族の人権を守る関西ネットワーク

RINKは、Rights of Immigrants Network in Kansai の略。日本語の発音が同じ英語のlink「つながり」の意味もかけている。

「差別のない、多民族・多文化共生社会の実現を！」をキャッチフレーズに、外国人の人権に関心をもつ市民団体や弁護士、労働組合、医療関係者、民族団体などが共通の課題に協力して取り組むことや情報交流を目的とするネットワーク組織で、1991年12月に結成された。現在の会員は約150人の個人と30団体で、会費と寄付金で運営されている。

RINKの活動は次の3点が柱となっている。

①外国人（労働者）問題に取り組む個人と諸団体の経験交流・情報交換と研究活動。
②RINKを構成する個人・諸団体がおこなっている具体的な人権活動への共同支援。
③行政機関や企業団体への、外国人の人権保障に向けた各種制度の改革要求や提言。

http://www.geocities.co.jp/kansai_immigrant_rights/

「マイ・マイ・フェスティバル」（2006年10月）でもちつきをする参加者

大阪国際交流センターでのイベントにブースを出展〈提供・RINK〉